

iPad Pro対応の読影システムは放射線科医の働き方改革に貢献するか？

イリモトメディカル | 煎本正博

本年4月、イリモトメディカルが日本初導入した新しい読影システムについてその初期経験を報告したい。

ノートPCを読影端末に活用

まずは、台湾のメーカーEBM Technologiesが開発したシステム“Rad@”を用いた読影端末である。Rad@はWindows PC上で動く任意の画像ビューワの画像をiPad Pro上にDICOM Part14に対応した階調で最大3Mまで表示することができ

るソフトウェアである。Windows PCであればノートPCでも使用可能である。

導入したシステムはWindows10のノートPC(NEC Lavie 13.3インチ、Corei7)とiPad Pro12.9インチ2台を接続したシステムで、ノートPC側にアプリをインストールし、処理用の dongle をHDMI端子に接続する。iPad側にはApple storeより専用のアプリをダウンロードしておけば、システムは完成する(図1ab、図2)。

全システムがノートPC用のソフトウェアの中に収納できてしまい、12.9インチの2面構成でもPCを入れて2.5キロ程度、1面構成なら1.6キロと楽々持ち歩ける。ビジネスバックにもすっぽり入ってしまい(図3)、1面構成ならば着替えのシャツを入れても1泊程度の出張なら余裕で持ち歩けそうである。

筆者は遠隔画像診断サービスを行っているが、普段はオフィス外では読影しな



図1 a 手前がRad@を使ったiPad Pro12.9インチによる読影システム。右2面のiPad Proで画像を表示し、左のノートPCでレポートを作成する。後方は従来の21インチ医用モニタによる読影システム。



図1 b 画面の小ささにはすぐに慣れる。2Mまたは3MのDICOM階調で表示されるので、全く問題がない画質で読影できる。